短 報

受け取った恩恵の相対的な大きさが感謝に及ぼす影響

—他者が受け取った恩恵を比較対象として—

山本晶友 上智大学大学院総合人間科学研究科

樋口匡貴 上智大学総合人間科学部

**The effect of relative amount of benefit received on gratitude:
When you compare the benefit you received with what another received**

Akitomo Yamamoto (*Graduate School of Human Sciences, Sophia University*)Masataka Higuchi (*Faculty of Human Sciences, Sophia University*)

We examined the extent to which a beneficiary experiences gratitude toward a benefit, as a function of what another beneficiary has received. In our experiment, participants who are university students read a scenario in which the protagonist received help from his or her classmate for a report. Imagining themselves as the protagonist, participants rated the extent to which they felt grateful. We manipulated what a protagonist's friend underwent (i.e., receiving better help, receiving worse help, or being refused help). In the control condition, no mention of the protagonist's friend was made. Overall, there was no significant difference between the gratitude experienced in various conditions. However, a comparison of the gratitude scores of participants in the lower half of each condition revealed that, the participants who read that the friend was refused help felt more grateful than those in the control condition. This suggests that knowing another person fails to receive helps increases gratitude among those who otherwise feel less gratitude.

Key words: gratitude, relative amount of benefit, comparison

他者から恩恵を受け取った時に生じる感情である感謝は、恩恵の提供者と受領者の良好な関係構築に寄与するポジティブ感情である。感謝は、他者の善意から生じたと知覚される恩恵の受領に対するポジティブな感情的反応と定義されている (Tsang, 2006)。そしてある人物に対して感謝を感じる程度が高いほど、その人物との関係満足度が高くなることが縦断的に確認されている (Algoe, Gable, & Maisel, 2010; Algoe, Haidt, & Gable, 2008)。

本研究では、このような機能をもつ感謝に、その恩恵の提供者でも受領者でもない人物についての情報が及ぼす影響を検討する。この検討により、感謝がもたらす良好な関係構築の成立条件を集団の観点から考察できるようになる。具体的には、同じ大きさの恩恵を

同じ提供者から受け取る場合であっても、周りにどんな人物がいるのかによって感謝の生じ方が変わり、それゆえに関係構築の成立が左右されるという推論が可能になる。

ある恩恵の受領で生じる感謝がその恩恵の提供者でも受領者でもない人物についての情報による影響を受けることを示した先行研究としては、Wood, Brown, & Maltby (2011) がある。この研究は、自分が受け取った複数の恩恵の中で相対的に大きい恩恵であるほどその恩恵に対する感謝が強くなることを示した。この研究で用いられたシナリオでは、欠席した大学の授業に追いつくための勉強を手伝ってもらえたという場面と、生活費に困っていた時にお金を貸してもらえたという場面において、11人の恩恵提供者(援助者)からそれぞれ異なる大きさの恩恵(援助)が提供された。そして恩恵の受け手の立場となってこのシナリオを読んだ参加者は、11人の恩恵提供者それぞれに対して感じる感謝を評定した。その結果、同じ恩恵量で

Correspondence concerning this article should be sent to: Akitomo Yamamoto, Graduate School of Human Sciences, Sophia University, 7-1 Kioicho, Chiyoda-ku Tokyo 102-8554, Japan (e-mail: y_akitomo_1029@yahoo.co.jp)

もその恩恵量が11人の中で上位であるほど、および最大値に近く最小値から遠いほど、参加者は感謝の評定値を高くした。これは、等しい大きさの恩恵であっても、周りにいる他の提供者からもたらされる恩恵次第で、当該恩恵に対する感謝の強さが変わることを示唆する結果である。

このようなWood et al. (2011)の研究を踏まえ、本研究では以下の二点について新たに検討する。まず一点目は、自分以外の人物が受け取った恩恵との相对比较による影響である。Wood et al. (2011)が検討したのは、自分一人が複数の提供者から恩恵を受け取った際の相对比较であった。しかしそういった相对比较だけでなく、自分以外の人物が受け取った恩恵と自分が受け取った恩恵との相对比较も、状況としては生じうる。このような相对比较の効果を調べれば、相对比较が感謝に及ぼす影響について推論可能な状況の範囲を拡張できる。

自分以外の人物が受け取った恩恵との相对比较が感謝に影響する可能性はまだ直接検討されていない。しかし、利益を得て生じる満足度を従属変数とする研究においては、その影響が確認されている (Austin, McGinn, & Susmilch, 1980; Ordóñez, Connolly, & Coughlan, 2000)。これらの先行研究では、自分が得た報酬の大きさが同じであったとしても、別の人物が得た報酬の方が小さければより満足し、大きければ満足しない、つまり報酬の相対的な大きさに応じて満足度が変化することが示された。もっとも、これらの研究における報酬は得られることをある程度確信できるのに対し、他者からの恩恵では確信できない。そのような他者からの恩恵は、少しでもあれば感謝が生じやすく、相对比较の影響が出ないとも考えられる。しかし、少なくともWood et al. (2011)では相对比较によって感謝の強さが変化する現象が見られている。このことを考えると他者からの恩恵によって生じる感情であっても、報酬に対する満足度の研究と同じような相对比较による効果が生じる可能性はある。本研究では感謝を従属変数として測定しそれを直接確かめる。

新たな検討内容の二点目は、恩恵提供を断られる場合との相对比较による影響である。Wood et al. (2011)が検討したのは、恩恵を提供してくれた場合同士の相对比较であった。この検討により、少ししか提供してくれない人と比べることにより感謝を感じやすくなることが示唆された。しかし、このような少ししか提供してくれない人との比較よりも、全く提供してくれない人との比較の方が、感謝の促進効果が強い可能性は十分考えられる。

以上の二点を踏まえ本研究では、他の人物が自分と異なる恩恵を受け取った、ないしは拒否により恩恵自体を受け取れなかったという情報を操作する。そしてそれによって感謝の強さが変動するか調べることを本

研究の目的とする。本研究の仮説として、より大きい恩恵を受け取った他者の情報により感謝が弱くなり、より小さい恩恵を受け取った他者の情報や恩恵自体を受け取れなかった他者の情報により感謝が強くなると考えられる。

このように、他の人物が受け取る恩恵の情報だけで感謝の強さが変わるのだとしたら、これまで着目されてこなかった要因と感謝の関係性が見出されていくことが期待できる。たとえば本研究の仮説が真なのだとしたら、自身を取り巻く集団で恩恵提供が起こりにくい場合こそ、そこにおかれた個人は感謝を体験しやすいのかもしれない。その場合、集団内に恩恵提供を波及させうるメカニズム (e.g., Nowak & Roch, 2007) や、個人の行動が集団全体の行動に影響するプロセス (e.g., Granovetter, 1978) さえも、その集団内の個人の感謝を間接的に規定するのかもしれない。本研究のような検討は、このように集団の観点と感謝の研究をやがて関連づけていくことになる研究のひとつとして位置づけられる。

なお本研究では感謝に加え、恩恵に対する認知的評価の変数も測定する。具体的には、受け取った恩恵の価値、恩恵提供者が被ったコスト、恩恵提供者の誠実性についての認知的評価である。こういった変数は感謝の規定因となりうることが知られているため (Wood, Maltby, Stewart, Linley, & Joseph, 2008)、感謝の変動が生じた際に解釈の手がかりになると考えられる。

方 法

本研究は、「上智大学『人を対象とする研究』に関する倫理委員会」の承認を受けて実施された。また、研究の仮説、主要従属変数、実験計画、仮説検討のための分析方法、サンプルサイズとその決定方法、分析対象の除外基準について、研究実施に先立って事前登録を行った (<https://osf.io/ge7j3/register/5771ca429ad5a1020de2872e>)。

参加者

関東の大学の授業受講生278名が授業終了後に一斉に参加した。サンプルサイズは受講生数の見積もりに基づいて300名と決定していた。事前登録していた分析方法である1要因4水準参加者間計画の分散分析では、一水準あたりの観測数が45以上であれば危険率.05、検定力.80で中程度の母集団効果量Cohen's $f=0.25$ を検出できる。このことから約300名規模の受講生に参加を募れば全員が有効回答とならずとも十分な検定力になると考えられたため、300名より実際の有効回答数が小さくても追加のサンプリングを行わない旨を事前登録していた。

実験計画と手続き

比較対象（大受領他者／小受領他者／非受領他者／統制）を参加者間要因とする1要因4水準の実験計画であった。質問冊子を用いた実験であり、4種類のシナリオのいずれかが印刷された質問冊子を実験に配布することで要因操作を行った。参加者に、質問冊子のシナリオを読ませた後で質問項目に回答させた。

質問冊子の構成

1ページ目にシナリオ、2ページ目に認知的評価と感謝の測定項目、3ページ目にその他の質問項目を記載した。2ページ目の冒頭には「シナリオ内の状況にいる時のあなたの考えについて、当てはまる数字に丸をつけてください。このページに回答する時に、前ページに戻ってシナリオを読み直してもかまいません。」と記載した。

シナリオ 参加者自身の体験のつもりでよく読んだ上で後の質問に答えるよう指示する教示文と共に記載した。シナリオをFigure 1に示す。「あなた」と呼ばれる人物が大学の授業で理解が追いつかずにターゲット恩恵提供者（同級生）に相談したところ図書館の本をタイトル付きで紹介してくれたという内容が、全条件のシナリオで共通であった。統制条件はこの記述のみのシナリオであるのに対し、それ以外の3条件においては、ターゲット恩恵提供者に相談する前に比較対象となる友人の経験を想起する記述があった。この想起内容において、大受領他者条件での友人はより大きい恩恵（本の詳細な紹介とノート貸与の申し出）を、小受領他者条件での友人はより小さい恩恵（本を読めばいいという助言のみ）を受け取っており、非受領他者条件での友人は恩恵提供を拒否されたという内容にした。なお、登場人物の人数の都合上、統制条件のみターゲット恩恵提供者をAと表記し、他の3条件においてはBと表記した。したがって、以下に報告する質問項目の内容でBと表記している部分は、統制条件ではAと表記した部分である。

認知的評価の測定項目 Wood et al. (2008) を参考にした項目であり、いずれも-4から4の9件法で、0に「どちらともいえない」とラベリングした双極尺度であった。価値の測定項目は「Bがしてくれたことは、あなたにとってどのくらい価値がありますか?」という項目であり、-4に「全く価値が無い」、4に「非常に価値がある」とラベリングした。コストの測定項目は「Bは、こうしてくれたことによってどのくらい負担を被ったと思いますか?」という項目であり、-4に「全く負担を被っていない」、4に「非常に負担を被った」とラベリングした。誠実性の測定項目は「この時Bは、“あなたのために”という誠実な思いをどのくらい持っていたと思いますか?」という項

目であり、-4に「全く持っていなかった」、4に「非常に持っていた」とラベリングした。

感謝の測定項目 冒頭に「Bの施しを受けた時のあなたの気持ちについて当てはまる数字に丸を付けてください」と記載した。感謝の測定項目は「Bに感謝している」、「Bにありがたいと感じる」、「満足している」という3項目であった¹。このうち第3の項目は、蔵永・樋口 (2011) を参考にした項目であり、ポジティブな感情的反応 (Tsang, 2006) である感謝を測定する上で、妥当性を高めるために含めた。そしてフィラー項目として「Bが頼もしいと感じる」、「Bは優秀な人だと思う」という2項目を末尾に加えた。測定項目はいずれも0から8の9件法で、0に「当てはまらない」、2に「わりと当てはまる」、4に「だいたい当てはまる」、6に「非常に当てはまる」、8に「極めて当てはまる」とラベリングした単極尺度であった。ラベリングを強調の修飾語に偏らせたのも単極尺度にしたのも、感謝の測定における天井効果 (Tsang, 2007) が生じるのを防ぐことが目的であった。

その他の項目 年齢を尋ねる項目、性別を尋ねる項目、研究意図への気づきを確かめるための「この質問紙調査の意図について思い当たることはありますか。ある場合に限り、その思い当たることを書いてください」という項目を最後のページに記載した。

結 果

回答漏れなどの回答不備がある7名（大受領他者条件2名、小受領他者条件1名、非受領他者条件3名、統制条件1名）と、研究意図に気付いていたと考えられる14名（大受領他者条件8名、小受領他者条件5名、非受領他者条件1名）を除く、257名（男性59名、女性197名、その他1名）を分析対象とした。平均年齢は20.00歳 ($SD=1.35$) であった。

感謝の測定項目の個人内平均をそれぞれ算出し、感謝得点 ($\alpha=.91$) とした。記述統計をTable 1に示す。

事前登録をしていた分析

実験条件を独立変数とし、感謝得点を従属変数とする1要因4水準参加者間計画の分散分析の結果、主効果が有意でなかった ($F(3, 253) = 1.20, p = .309, \eta^2 = .01$)。

事前登録をしていない分析

同じデザインの分散分析の結果、価値、コスト、誠

¹ 質問冊子では、感情を測定するための項目が他にも6項目あり、感謝の測定項目と合わせて計9項目をランダムに決めた順序で記載した。これらについての報告は本文中では省略する。また、この6項目への回答は本研究の結果を歪めるほどの影響を持たないと考えられる。

大受領他者条件

あなたは、大学のある授業で理解が追いつかずにいます。
 他にもこういった人はいるようですが、
 あなたはこの授業の課題のレポートをどう書いていいのかわかりません。
 あなたは、別の授業で課題に困っていた友人の話を思い出しました。

友人の話

授業の理解が追いつかなくて、レポートをどう書いていいのかわからなかったから、
 その時同じ授業を受けてたAという同級生に助けて欲しいって言った。そしたらAに、

図書館にある××っていうタイトルの本の、
特に×章を読むと役にたつよ。
その部分をまとめたノートがあるから貸してあげようか。

と言われたよ。お陰でレポートが書けた。

友人のこの話を思い出したあなたは、
 あなたと同じ授業を受けている同級生のBに助けを求めました。するとBに、

図書館にある〇〇っていうタイトルの本が役に立つよ。

と言われました。
 これで参考にすべき本を自分で探さずに済みました。
 ただしレポートを書くには、この本を理解してまとめる必要があります。

小受領他者条件

実下線部が「そしたらAに、何か本を読んでみたらいいんじゃないかな。と言われたよ。お陰で、まずは本を探せばいいんだってことがわかった。まあ、使えそうな本を自分で探して、それを理解してまとめる必要はあったんだけどね。」であった。

非受領他者条件

実下線部が「まあその時Aには、うーん、自分で何とかしてよ。と断られちゃって、結局は何もかも困った状況のままだったんだけどね。」であった。

統制条件

4行目から破下線部手前までの内容が無く、破下線部が「そこで」であった。また、上記でBと表記されている人物はAと表記されていた。

Figure 1. シナリオ内容。挿絵は登場人物の混乱を防ぐために入れた。なお実際の質問冊子において下線は付いていない

Table 1
条件ごとの各得点の平均値（標準偏差）

条件名	大受領他者	小受領他者	非受領他者	統制	全体
<i>n</i>	61	65	67	64	257
感謝得点 [0, 8] ^a	5.31 (2.05)	5.13 (1.91)	5.61 (1.83)	4.97 (2.29)	5.26 (2.03)
事前登録していなかった分析における従属変数					
認知的評価 [-4, 4] ^a 価値	2.70 (1.13)	2.37 (1.34)	2.69 (1.26)	2.38 (1.67)	2.53 (1.37)
コスト	-1.08 (2.25)	-1.86 (2.11)	-1.49 (1.89)	-1.83 (2.16)	-1.57 (2.12)
誠実さ	1.00 (1.70)	0.74 (2.11)	1.07 (1.88)	0.98 (1.80)	0.95 (1.87)
「満足している」の項目を除く 2項目での感謝得点 [0, 8] ^a	5.52 (2.16)	5.29 (1.93)	5.91 (1.83)	5.20 (2.42)	5.48 (2.10)
「満足している」の評定値 [0, 8] ^a	4.89 (2.32)	4.80 (2.11)	5.01 (2.25)	4.53 (2.38)	4.81 (2.26)
<i>n</i>	32	32	32	32	128
上位32名の感謝得点 [0, 8] ^a	7.00 (1.00)	6.76 (0.96)	7.15 (0.73)	7.02 (0.68)	6.98 (0.85)
下位32名の感謝得点 [0, 8] ^a	3.63 (1.14)	3.49 (1.05)	4.07 (1.32)	2.93 (1.25)	3.53 (1.25)

^a理論的範囲。Table 2
統制条件における感謝得点の度数分布表

階級	度数
8×1/7未満	2
8×1/7以上 8×2/7未満	9
8×2/7以上 8×3/7未満	11
8×3/7以上 8×4/7未満	7
8×4/7以上 8×5/7未満	4
8×5/7以上 8×6/7未満	13
8×6/7以上	18

注) 階級数はスタージェスの公式 (Sturges, 1926) に基づき、2を底とするグループサイズの対数に1を加えた値とした。

実性のいずれを従属変数とする場合においても主効果が有意でなかった ($F_s < 1.9$, $p_s > .10$)。次に補足的分析として、感謝の測定項目のうち感謝のみを直接意味する2項目である「Bに感謝している」および「Bにありがたいと感じる」の評定値平均と、そうではない1項目である「満足している」の評定値を弁別し、それぞれを従属変数として分散分析を行ったが、いずれも主効果が有意でなかった ($F_s < 1.6$, $p_s > .10$, 記述統計はTable 1)。

実験操作を加えていない条件である統制条件の感謝得点において双峰性が見受けられたため (Table 2)、統制条件の感謝得点を対象に、mclustパッケージ ver-

sion 5.2.3 (Fraley & Raftery, 2002; Fraley, Raftery, Murphy, & Scrucca, 2012) を用いてEMアルゴリズムによる混合正規分布モデルの推定を行った。等分散モデルおよび異分散モデルのそれぞれで混合数1から9までの場合のBICを算出した結果、混合数2の異分散モデル (BIC=275.95)、混合数2の等分散モデル (BIC=278.13) と順に最も当てはまりがよく、混合数1から9のうち2と想定することが相対的に望ましいことが支持された²。混合数2の異分散モデルを想定した時のパラメタ推定の結果、高得点である方の分布は平均7.02、分散0.46であり、低得点である方の分布は平均2.97、分散1.66であった。

このモデルに基づくクラスタリングの結果、感謝得点の高低で32名ずつのクラスタに分かれた。そこで、感謝得点を従属変数とする分散分析を、各条件の感謝得点の上位32名のみの場合、および下位32名の場合のそれぞれで実施した (記述統計はTable 1)。その結果、条件の主効果は上位32名では有意でなかったが ($F(3, 124) = 1.15$, $p = .334$, $\eta^2 = .03$)、下位32名では有意であった ($F(3, 124) = 5.01$, $p = .003$, $\eta^2 = .11$)。統制条件との有意差を検定するDunnettの*t*検定の結果、非受領他者条件は有意に高く ($p = .001$, $g = 0.89$)、

² 「満足している」という項目を除く2項目での感謝得点で同様のモデル推定をした場合も、混合数2の異分散モデル (BIC=283.37)、混合数2の等分散モデル (BIC=287.31) と順に最も当てはまりがよかった。

大受領他者条件 ($p=.055, g=0.58$) と小受領他者条件 ($p=.152, g=0.49$) は統制条件との有意差がなかった。この下位32名においては、価値と誠実性において条件の主効果が有意でなかったが ($F_s < 1.7, p_s > .10$)、コストにおいては有意であった ($F(3, 124) = 2.75, p = .046, \eta^2 = .06$)。コストについてのDunnettの t 検定では小受領他者条件 ($M = -1.25, SD = 2.29$) のみ統制条件 ($M = -2.44, SD = 1.76$) より高い方向での有意差があり ($p = .039, g = 0.58$)、大受領他者条件 ($M = -1.34, SD = 1.99$) や非受領他者条件 ($M = -2.00, SD = 1.57$) では統制条件との有意差がなかった ($p_s > .06$)。

考 察

本研究では、他の人物が自分と異なる恩恵を受け取った、ないしは拒否により恩恵自体を受け取れなかったこととの相対比較により、自分が受け取った恩恵に対する感謝の強さが変動するか調べることを目的としていた。仮説は、より大きい恩恵を受け取った他者の情報により感謝が弱くなり、より小さい恩恵を受け取った他者の情報や恩恵自体を受け取れなかった他者の情報により感謝が強くなるというものだった。

事前登録の通りサンプル全体で比較した結果、比較対象の情報による感謝の変動は見られなかった。すなわち、より大きい恩恵を受け取った他者の情報、より小さい恩恵を受け取った他者の情報、拒否をされて恩恵を受け取れなかった他者の情報のどれかを呈示されることによって後に自分が受け取る恩恵への感謝の強さが変化することはなく、この比較において仮説は支持されなかった。

しかしこの結果は、双峰性のある統制条件 (Table 2) をベースラインとした比較の結果である。本研究における感謝得点は、比較対象のない条件である統制条件において二つのクラスタが混在していた。一方のクラスタは高得点なピークを持ち分散が小さいのに対し、もう一方のクラスタは理論的中央値付近にピークを持ち分散が大きかった。この二つのクラスタを統合して算出する感謝得点の平均値は統制条件全体を代表しているとは言いがたく、それゆえに、統合したものをベースラインとした比較では検出されるべき相対比較の効果が検出されなかった可能性が考えられる。

統制条件に二つのクラスタが混在していたことを受け、本研究では高得点のクラスタと低得点のクラスタのそれぞれをベースラインとした比較を試みた。その際には、他の条件の中から各ベースラインに相当すると思われるサンプルを得点の順位に基づいて抽出して比較した。その結果、低得点のクラスタをベースラインとする比較において、非受領他者条件での感謝が高くなっていた。厳密な無作為割り付けによる比較とは言いがたいものの、これは事前登録された仮説通りの方向性の結果であった。

この結果は、感謝を感じにくい個人が恩恵を受領できなかった他者の存在を知るだけで感謝を感じやすくなる可能性を示唆している。Wood et al. (2011) が示したのは、他の小さい恩恵と比べることにより感謝を感じやすくなる現象であったが、人が感謝を感じる恩恵は必ずしも大小の比較が成立するものではない (e.g., 蔵永・樋口, 2011)。一方、恩恵を受領できるか否かという比較であればおよそ全ての恩恵において成立しうる。その意味で本研究は、相対比較が感謝に及ぼす影響について推論可能な範囲を、Wood et al. (2011) の結果だけでは言及できない範囲にまで拡張したといえる。

このように感謝という感情で相対比較による影響が見られたことは、単なる報酬への満足度が相対比較により変動すること (e.g., Austin et al., 1980) 以上の意味をもつ。なぜなら、他者の善意による恩恵で感謝を感じた個人は、他者の善意を伴わない利益を得て単なるポジティブ感情を体験した個人以上に向社会的になるためである (Tsang, 2006)。また、感謝は恩恵提供者に近づく行動を駆動し (Bartlett, Condon, Cruz, Baumann, & DeSteno, 2012)、新たな関係の構築 (Algoe et al., 2008) や、既存の親密な関係の強化 (Algoe et al., 2010) を可能にする社会的な感情である。このような機能をもつ感謝が恩恵の相対比較による影響を受けるのだとしたら、恩恵の提供者と受領者の良好な関係を構築するという感謝の機能が二者を取り巻く文脈に左右される可能性が示唆される。

なお、本研究だけでは明らかにされなかった点も複数存在する。具体的には (a) クラスタが二つに分かれた理由³、(b) 高得点のクラスタにおいて相対比較の効果が見られなかった理由、(c) 大受領他者条件や小受領他者条件での相対比較の効果は低得点のクラスタにおいても見られなかった理由、(d) 認知的評価において見られた条件間の差が感謝の差と対応していなかった理由について、本研究のデータだけでは特定できない。これらについては、理由の候補と考えられる変数を測定ないし操作する研究によって、一つひとつ検討していく必要がある。

例えば (a) と (b) の理由の候補としては、恩恵の主観的価値を感じられない場合でもその恩恵への感謝を感じるという個人特性 (Morgan, Gulliford, & Kristjánsson, 2017) が挙げられる。この個人特性を持つ者は、自分が受け取った恩恵が比較対象に比べてどれほど大きいにかかわらず強い感謝を感じる可能性があるため、感謝の高得点クラスタに属しやすいとともに、恩恵の大きさの相対比較の影響を受けにく

³ 統制条件のうち女性に限定した場合、混合数2の等分散モデル (BIC = 197.31)、混合数2の異分散モデル (BIC = 201.04) と順に最も当てはまりがよかったため、性別でクラスタが分かれたわけではないと考えられる。

い可能性がある。したがってこの個人特性の有無で人が二分されるのだとしたら (a) と (b) の説明がつく。次に (c) の理由の候補としては、心的取り消し (Koo, Algoe, Wilson, & Gilbert, 2008) が挙げられる。心的取り消しとは自分の体験が起らなかった場合を想像することであり、ポジティブな出来事に心的取り消しを施すとポジティブ感情が強くなる (Koo et al., 2008)。これを踏まえると、本研究で恩恵を受け取らなかった他者を見て感謝が上昇したのはこの心的取り消しが促進されたからであると考えることができ、大受領他者条件や小受領他者条件では心的取り消しが促進されなかったために感謝に影響しなかったという説明も可能になる。さらに、もし心的取り消しが恩恵への認知的評価と独立して感謝を上昇させるならば、それは (d) の理由となる。以上の可能性は、ここで挙げた候補の変数を測定しつつ本研究と同様のパラダイムで研究を行えば検討できる。

本研究の限界点は恩恵受領状況の設定にも見られる。本研究では授業の重要度が明文化されていない状況での検討であったために、恩恵の重要度は参加者の解釈次第となっていた。本研究の結果がこのような状況以外にも一般化できる現象であるのかは未だ分からないため、他の恩恵受領状況での検討も将来的に必要である。

こういった更なる検討は必要であるが、本研究は恩恵の提供者と受領者の間で生じる感謝という感情がそのどちらとも直接関係のない人物の情報により影響される可能性を示した。本研究のように感謝を二者関係のやり取り以上の範囲に拡張する研究が蓄積されていけば、これまで感謝とは関係ないと考えられてきた先行知見も感謝に関する議論に援用できるようになり、感謝や関係構築に関する研究の発展がもたらされると考えられる。

引用文献

- Algoe, S. B., Gable, S. L., & Maisel, N. C. (2010). It's the little things: Everyday gratitude as a booster shot for romantic relationships. *Personal Relationships*, 17, 217-233.
- Algoe, S. B., Haidt, J., & Gable, S. L. (2008). Beyond reciprocity: Gratitude and relationships in everyday life. *Emotion*, 8, 425-429.
- Austin, W., McGinn, N. C., & Susmilch, C. (1980). Internal standards revisited: Effects of social comparisons and expectancies on judgments of fairness and satisfaction. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 426-441.
- Bartlett, M. Y., Condon, P., Cruz, J., Baumann, J., & DeSteno, D. (2012). Gratitude: Prompting behaviours that build relationships. *Cognition and Emotion*, 26, 2-13.
- Frable, C., & Raftery, A. E. (2002). Model-based clustering, discriminant analysis and density estimation. *Journal of the American Statistical Association*, 97, 611-631.
- Frable, C., Raftery, A. E., Murphy, T. B., & Scruggs, L. (2012). mclust Version 4 for R: Normal mixture modeling for model-based clustering, classification, and density estimation. Technical Report No. 597, Department of Statistics, University of Washington.
- Granovetter, M. (1978). Threshold models of collective behavior. *American Journal of Sociology*, 83, 1420-1443.
- Koo, M., Algoe, S. B., Wilson, T. D., & Gilbert, D. T. (2008). It's a wonderful life: Mentally subtracting positive events improves people's affective states, contrary to their affective forecasts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 1217-1224.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011). 感謝の構造——生起状況と感情体験の多様性を考慮して—— 感情心理学研究, 18, 111-119.
- Morgan, B., Gulliford, L., & Kristjánsson, K. (2017). A new approach to measuring moral virtues: The Multi-Component Gratitude Measure. *Personality and Individual Differences*, 107, 179-189.
- Nowak, M. A., & Roch, S. (2007). Upstream reciprocity and the evolution of gratitude. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 274, 605-609.
- Ordóñez, L. D., Connolly, T., & Coughlan, R. (2000). Multiple reference points in satisfaction and fairness assessment. *Journal of Behavioral Decision Making*, 13, 329-344.
- Sturges, H. A. (1926). The choice of a class interval. *Journal of the American Statistical Association*, 21, 65-66.
- Tsang, J. A. (2006). Gratitude and prosocial behaviour: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, 20, 138-148.
- Tsang, J. A. (2007). Gratitude for small and large favors: A behavioral test. *The Journal of Positive Psychology*, 2, 157-167.
- Wood, A. M., Brown, G. D. A., & Maltby, J. (2011). Thanks, but I'm used to better: A relative rank model of gratitude. *Emotion*, 11, 175-180.
- Wood, A. M., Maltby, J., Stewart, N., Linley, P. A., & Joseph, S. (2008). A social-cognitive model of trait and state levels of gratitude. *Emotion*, 8, 281-290.

(2018年10月22日受稿, 2019年2月28日受理)